



TITLE:

人文 第5号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第5号. 人文 1972, 5: 1-41

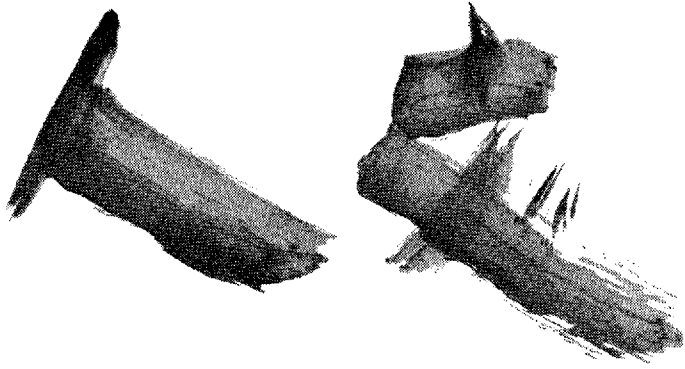
ISSUE DATE:

1972-06-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57131>

RIGHT:

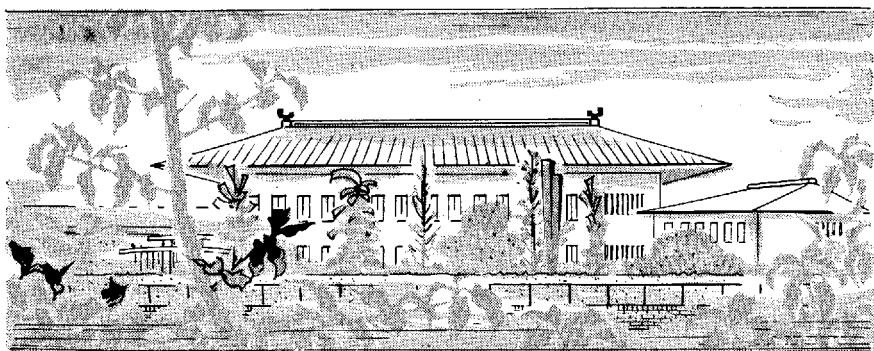


第五号



1972

京都大学人文科学研究所



人 文 第 五 号

1971年11月—1972年3月

も く じ

わたしの考え

会説の功

藤枝 晃 2

講演

開所記念公開講演

4

中国古典文化の特質

平岡 武夫

人類学におけるイメージの問題

藤岡 喜愛

離婚の社会学的考察

井上 忠司

書評

9

林屋辰三郎『日本の古代文化』(永田)／林屋辰三郎・梅植忠

夫・山崎正和編『変革と情報』(川勝)／梅植忠夫・河竹登志

夫編『比較芸能論』(熊倉)／会田雄次『日本人の忘れもの』

(梶原)／小野川秀美編『民衆索引』(樋口)／小野信爾・吉田

富夫・狭間直樹『革命論集』(副島)／会田雄次『日本の風土

と文化』(山本)／梅植忠夫ほか『日本人のころ』(藤枝)

共同研究のうき

17

私は夢想を語る(阪上)／現代の家族問題(明山)／『大正期

の急進的自由主義』の刊行にいたるまで(渡部)／不満ふたつ

(島田)／いそがしい、いそがしい(米山)／「不覚」のつづ

やき(眞膳)／辞令書の習作(平岡)

研究ノート

26

アッシリア学の将来

前川 和也

日本帝国主義と辛亥革命

副島 四照

顔元と毛沢東

小野 和子

おくりもの(流沙海西学会賞・名誉学位・人文科学協会助成金)

30

旅(フンメルとムール)

梅植 忠夫

お客さま(フリードマン／カラシジャ)

32

書いたもの一覧(四十六年十一月—四十七年三月)

34

人のうき(29)

カット・田中重雄

会読の功

藤 枝 晃

深夜ラジオの落語で、「何や、新聞よむみたいな読み方をして……」というセリフが出て、一瞬ハツとした。私の幼いころは、たしかに同じ朗読をするにも、新聞ならば新聞の、読本ならば読本の、それぞれ独特の抑揚があった。小学二年か三年かになって、わざわざ黙読の訓練を課せられた覚えがある。

同時に、何日か前に目についた一つの文章が、改めて気になった。ある作家が、電車の中で読み物を横から覗かれることの不愉快さを書いて、谷崎潤一郎がそんなときには読みかけの新聞を丸めて電車の窓から投捨てるまで腹を立てたとの話を引合いに出していた。車中などで本を読むときは、心理的に周囲を一応断ち切って一人の殻に閉じこもるものであって、「読書はどう考えても共同の作業ではない」とまでその人は言い切る。

黙読が読書法の主流となったのは、実はたいへん新らしいことな



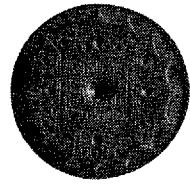
のだが、昔の読書の型はすっかり忘れられて、今日では、そういうひそやかな営みとして定着していることも事実である。それを改めて気にするのは、もうお判りのことと思うが、私たちの共同作業としての会読と思ひ合わせてである。学校の授業としての講読は今日でもありふれたことだけれども、一人前の研究者が集まっての会読などというものを常時やっている所は、確かによそにはあまりない。しかし参加者の方は、だいたい読書をもっとも個人的な営みとする習性が身についているので、時には戸惑いも起こることとなる。学校での講読の姿勢をそのまま持ちこまれたりすると頗る始末が悪く、なかなか歯車が噛み合わない仕儀となる。噛み合ったところで、サロンの雰囲気が出出し、個人作業からは出て来ない効果を示すことは、討論会や座談会と変る所がない。

会読の席で同じ文章に接して、違った専門の人たちの受取り方にハッとしたり、ギョッとしたりすることが、近ごろたいへん多くなった様に思う。吉川幸次郎先生の『金銭記』と『合汗衫』との中に、会読の途中の、横合いからのコメントや、時には無責任な放言といつてよい様な言葉まで小まめにとり入れられていて、それが本の中でむしろよく効いていることに、今ごろになって感心している。感心するのは、今まで私はそういう言葉を何も記録していなかったのだが、それが誠に惜しいことであつたと、やっと気がつきはじめたからである。それは会読のサロン以外の場では、絶対に引き出すことのできない言葉なのであるから。



講演

開所記念講演会



昭和四十六年十一月三日
於分館ホール

中国古典文化の特質

平岡武夫

天下を説く。

調和の理念を彼らは天と呼んだ。この理念によって結びついている世界が天下である。この理念の当為性が天命、天命を現実に実践するのが天子、その実践する能力および行為が徳、したがって、最高の有徳者が天子であり、その徳を分有して天命の遂行を助けるものが士であり、官である。この天命の認識は民を媒介にしてなされる。民の目・耳が即ち天の目・耳であり、民の心を失えば、即ち天命を失うのである。

このような經書の世界観を、私は天下的世界観と呼ぶ。周王朝がこの世界観を樹立した初めは、天・徳・民の三つの柱でこと足りたが、この世界観が維持され、発展してゆく上には、もう一つの柱が必要であった。それは文である。これもまた甲骨文の時代にはない概念である。そして周の創業の王は文王と呼ばれる。

殷周革命と辛亥革命とによって、私は中国の歴史を三つの時期に区分する。但し、これは西洋史における古代・中世・近世の区分法とは、まったく関係がない。殷周革命から辛亥革命までの約三千年間、それは經書が指導理念になっていた時代である。經書の理念は、天・徳・民の三つの概念を骨子にしている。みな殷の甲骨文の時代にはなかった概念であり、文字である。殷の如く、祖先神を究極の拠り所としている限り、氏族社会を超えた大一統の世界は成立し得ない。經書は

周王朝が權威を失うて、争乱の世となった春秋時代に、どのように政治をしてゆくべきか、諸子百家が説を競うたなかで、孔子は周初の天下的世界観に立ちもどることを説いた。その孔子は、生命の危険に瀕した時、「自分は天から与えられた徳をもっている」というて、暴漢を恐れなかった。そして別の日、同じような危険に遭った時、彼は「天がこの文を喪ばさないかぎり、文の担い手である自分は、何物をも恐れることは

ない」と言っている。ここでは徳が文と言いかえられている。孔子の周初復興への信念と情熱は、文の理念によって確固たるものになっている。

戦国と秦の後に、漢が天下を統一して、経書を国学に立てた時、漢字の文学、賦が成立していた。賦の字の意味は、漢字・漢語を美しい調和をもってしきならべることである。

この後、漢字の文学は、駢体文に発展し、唐の律詩にきわまる。そして清朝の終りまで、即ち天下的世界観が生命をもつところ、漢字の文化はつづく。天下は、漢字の文化を共通の基盤にする世界のことであった。ここでは、文をもって治めることが政治の目標であった。高級官吏は、事務能力よりも、詩文の優劣で詮衡された。詩文の上手に出来ないものは、調和の感覚を欠くものであり、政治する者として根本的に資格をもたぬものであった。中国の歴史の上で最も栄えた王朝は、五万篇の詩と二万五千篇の散文とを、千年以上の歳月を隔てた我々に残している。漢字文学のすぐれた作品を、漢代にも周朝にも遡って見ることができし、宋より後になれば、あまりに多すぎて、手をつける所を見出すのに苦しむ。

漢字そのものの上手下手もまた人物評価の重要な基準であった。漢字を書くことは、調和を造形してゆく

ことであつたからである。漢字は単音節である。おのづから二字が組み合わされて一語となる。この語と語とが組み合わされて句となり、さらに文になってゆく。その時、字面・音調のともに美しく、意味の確かなものが選ばれて、熟語となり、文語となり、詩語となる。それらをわきまえて綴ることによって調和ある詩文がまた出来てゆく。

天下的世界観のあかしを、知識人は漢字の文化の中に見出し、そしてまたそこにおいて自らその世界観を実証していたのである。道と文とは本質的には乖離しているものではない。中国古典文化の特質は、天下的世界観と漢字という、極めて非西洋的な、しかし甚だ文化度の高い、二つの要素が経となり緯となつて織り出している錦の文様において認められる。

人類学におけるイメージの問題

藤岡喜愛

私が、人類学的な調査法として、ロールシャハ・テストを使用するようになってから、すでに二〇年になる。このテストは、統覚検査法(TAT)などとも

に、文化人類学の中で、文化とパーソナリティー問題が注目されるようになって、急速に人類学者の間に知られることとなった。これらのテストは、文化とパーソナリティーの関連性の問題において、客観的にパーソナリティーを取り出すものと期待された。世界各地における文化の特殊性に対応したパーソナリティーの特殊性が見出されるものとして注目された。しかし結果からいえば、これらのテストは、そうした特殊性を示すほどに敏感な道具ではなかった。

私自身のロールシャハ・テストによる調査の結果からいえば、これによって捉えられるパーソナリティー像は、世界各地の生活形態に、大ざっぱな対応が見られる。すなわち、人類古来の生活形態である狩猟採取生活の人々からは幼児型が得られ、ネパールやカラコルムなど古風な農業の地域では児童型が得られた。日本や欧米のような産業社会からは成人型が得られる。

(この結果は、すべて成人から得たもので、日本・欧米を規準としたときにあらわれたものである)。こうした幼児型から成人型へという系列を知覚の面から整理すると、臨床的な資料を考慮して、知覚のレベルの変遷という現象も含まれている。

われわれのような、産業社会に生育したものは、輪郭が明瞭で且つ閉じているような、物体を認知する

ような知覚が優勢である。これをレベル3と呼ぼう。しかしわれわれの住む世界には、山の形、野のひろがり、木の姿、川の流れなど、知覚の対象は明瞭でありながら輪郭があいまいなものも多い。これらを知覚するレベルをレベル2と呼ぼう。

われわれのもっとも原始的な知覚のレベルは、赤ん坊が母の肌に触れているような、「在る」ということだけが明瞭で、対象の特異点や輪郭が無いような知覚である。レベル1と呼ぶこの知覚は、個体の生長とともに表面にはあらわれなくなる。

さきに述べた、テスト結果の系列は、知覚レベルの優勢さの系列でもあり、幼児型から成人型への系列は、レベル2から3への重点の移行を示している。私はこの系列の語るものは、すなわち、人類の生活形態の展開にもなったパーソナリティーの進化の姿であると考える。

ふたたびロールシャハ・テストに帰って、このテストが捉えるパーソナリティーとは何か。このテストは、受ける人が内蔵しているイメージの世界の様態を捉えているものである。パーソナリティーの進化は、知覚のレベルをも含めたイメージの世界の進化でもある。

こうして、イメージの問題が人類学の問題としても位置づけられることとなった。

これまで、文化とパーソナリティーの関連の問題は、文化がパーソナリティーを造る、という面に偏るきらいがあった。しかしイメージの世界としての個人のパーソナリティーは独自の働きを持つもので、そこには、文化をも創造する力のあるものとしての、内なる力が認められる。

こうした内なる力は、臨床的には、神経症者の自己統合力の回復として、はやくから認められていた。われわれはこの方面の先駆者としてフロイトを知っている。フロイト以後、ドズワイユの覚醒指導夢、わが国でも内観法また観想など、かならずしも病理的でない方法の研究も進んでいて、人類学はいま、イメージの世界へ探求の手をのぼすことが可能となっている。これらの方法に共通して認められることは、個人のイメージの世界に、基本的に重要なイメージが蓄積されているという点である。臨床的には、患者がイメージを展開している過程で、基本的なイメージが表現されると病状が好転したり、活力が増したりするのである。このような内発的な力を持つイメージの世界は、各人の身体の生育にもなって構成されるのであるが、身体の生育が文化とはある程度独立して生じているのと同様に、イメージ界の生育も、決して全面的に文化に依存しているのではない。最近急速に進歩した習性

学の示すところによっても、それはあきらかである。それゆえ、当初に問題となった文化とパーソナリティーの関連の問題は、イメージの世界を探索することによって、はじめてもっとも基本的なところに触れることとなる。すなわち、人類学におけるイメージの問題は、いまようやくその重要性をあきらかにした、といえるのである。

離婚の社会学的考察

井上 忠 司

わが国ほど、離婚の容易な国はない。それは、「協議離婚」と呼ばれる簡易な制度のおかげである。

離婚統計の示すところによれば、おおかたの予想に反して、離婚率（法手続きをふまえた離婚件数の、同年人口千人にたいする割合）は、明治時代の方が今日よりもはるかに高い。戦後にかぎってみても、離婚がどんどんふえてゆくような傾向は、必ずしも認められないのである。いったいどうして、こんなにも離婚は少ないのであろうか。なぜ、わが国の離婚はもっとふ

えないのだろうか。昨今のマスコミの離婚情報過多と比べるにつけても、わたしは、たいへん不思議に思わざるをえない。離婚の社会学的研究は、この問に答えるものでなければならぬと考える。

離婚の社会学的研究は、(1)離婚率、(2)離婚原因、(3)離婚観の三つのテーマに大別される。ここでは、(2)を中心にとりあげることにしよう。

調停離婚申立理由の統計によれば、戦後における離婚原因の年次的推移は、「尊属との不和」が激減し、「性格の相違」が急増したことをのぞけば、あまり大きな変化がみられない。この傾向を評して、民主化のあらわれなどと説く向きもあるが、それは事実の半面にすぎぬ。

概して、夫婦関係を支えている力には、二つがある。一つは、夫婦関係を外側から規制している社会的統制力であり、他の一つは、夫婦相互の内側にはたらく对人的結合力である。家父長制家族の崩壊は前者のウェイトをいちじるしく弱め、代わって、後者が重視されるようになったかにみえる。戦後の離婚原因が「制度的原因」から「情緒的原因」へと推移したのは、まさしくそのためであった。しかし、今日では、たしかにイエの規制力は弱まったが、離婚当事者にたいする社会的統制力は、依然としてほかにもいくつかはたらい

ていることを見のがしてはならない。離婚後の経済的自立の困難、子どもの問題、世間体、さらには再婚のむづかしさなどが微妙に作用して、それぞれ離婚の歯どめとなっているのだ。しかもそれらは、目下までのところ、すべて女性の方にひときわきびしい現実にある。

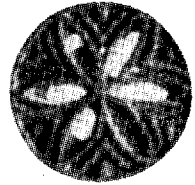
「性格の相違」という表現は、お互いの優劣を問うていない。たまたま性格の相違がお互いの許容度をこえるので、これ以上は夫婦であることを持続できなくなったにすぎぬという含みがある。他方、「不貞」などのようにどちらが「有責」であるかを明らかにするよりも、「性格の相違」のような「無責」の原因をあげる方が、世間体も悪くなくろう。内からも外からも同時に無難である表現、それが「性格の相違」の本態なのである。

当事者が離婚にふみきる決定的動機を問題にするばあいでも、当事者間の主観的原因とともに、当事者にたいする社会的統制力が彼らにとってどのようなうけとめられ、内面化されているかを問題にしなければならぬ。要するに、離婚の社会学的研究は、離婚にたいする社会的統制力という視点を中心にすえなければならぬのである。

書評

林屋辰三郎『日本の古代文化』

(B6判、三四〇頁、岩波書店)



本書を一読すれば、読者はあたかも清涼剤を口にしたように、思わず感歎の声をあげるに違いない。その最大の理由は、何といっても本書が未だかつてない斬新な構想よりする歴史叙述の新鮮さをもっているからである。

先ず構想として、本書は五つの章からなる。一章は弥生時代で、ここでは「杜」が象徴として主題にとりあげられる。同様に二章の古墳時代は「前方後円墳」、三章の継体・欽明朝は「伽藍」、四章の推古朝から律令国家の成立にかけては「国史」、五章の平城から平安朝にかけては「都城」がそれぞれ象徴として主題に選ばれている。

こうした一見奇抜とも思われる主題の選定に、先ず大きく目をみはる。しかも執筆に当っては「これまでの歴史学者の定説や論争に拘泥せず、哲学者や民俗学者などの意見を大幅にとりいれて、本書はかなり思い切った推論を行ない、新説を提出した」とある。

なるほど、一章で南山城の居館の神事の分析から民俗考古学の樹立を提唱するなどにはじまって、以下たとえば前方後円墳の原形は楯であるとしてその起原を服属儀礼に求めつつ国内の統一過程を論じたり、また仏教と神話の成立及び両者のかかわりを継体・欽明朝の内乱を背景に論じたり、また記紀の性格とか編集事業を通して律令

国家の成立過程を論じたり、或いはまた都城における外京や別業の存在から中世文化の胎動を感じとるなど、前人の未だ及ばなかった独自の新しい見解が、随所に光彩をはなっている。

こうした著者のいうところの「思い切った推論」や「新説」は、しかしながら決して唐突なものではない。「古代史を通して、古代文化への厳密な履歴書を提出しよう」という著者の決意に示されるように、いずれも長年の研究にもとづく十分な論拠をもってうらづけられており、それだけにまた大きな説得力をもってわれわれ読者に迫ってくる。

五つの象徴を主題にして雄大な古代史を構成し叙述していく手法は、さながらオーケストラにおける巨匠の指揮の冴えを見るようであり、ただ感服するばかりである。本書の構想といい、歴史叙述といい、ともに幅ひろい知識と深い洞察力をそなえた著者にして始めてなしうるものであり、そういう意味では本書は著者の研究のみごとな一つの結晶であるということができるだろう。

(永田英正)

林屋辰三郎・梅棹忠夫・山崎正和編

『変革と情報——日本史のしくみ』

(B6判、二九六頁、中央公論社)

「変革と情報」という主題は、すぐれて現代的なテーマである。現代における変革の様相が、情報化時代といわれるような状況では、それによってどんなあらわれかたをするか、といった問題が扱われるはずだと考える向きもあるだろう。ところが、これに「日本史のしくみ」という副題がついている。表題を見ただけでは、主題と副題との関係がどうなっているのか疑問をもつ人も多いだろう。

編者たちの説明によると、本書は「時間的なタテの系列にある変革期の問題と、空間的なヨコの系列から出てくる情報という問題線が交わったところで日本文化を考えろ」という試みの産物である。もう少ししていねいにいうと、第一の問題線は「変革期のほうに焦点をすえて、変化と動揺こそ歴史の常態であり、そのあいだに、わずかな期間の安定期がはさまっているのだ」という見方で、具体的に全日本史を見なおす」と

いう問題意識である。「林屋さんの変革史観」と命名されるこの視角について、私は大賛成である。中国史をかじっている私も専制体制などという一本槍で固定的にとらえられかねない中国の歴史を、何とかしてもっと動的に見なおしたいと、つねづね思っているからだ。

もつ一つの問題線は「歴史の動きには変革のエネルギーとともに、そのエネルギーに秩序と形をあたえる情報もまた大きな役割をはたしているはずだから、情報を中心にすえて具体的に日本史を見なおす」という視角である。このような梅棹さんの「情報史観」と、林屋さんの「変革史観」とが交わったところで、「変革と情報の日本史」に関する共同討議をまとめた結果が本書として結実した。共同討議には右の二人のほかに、山崎正和氏がレギュラー・メンバーとして、司馬遼太郎・上田正昭・村井康彦・原田伴彦の諸氏がゲストとして参加して

いる。

読みだすと、さすがにタレントぞろいだけに、面白い着想や鋭い見解がつきつぎに展開されて、最後まで巻をおかしめない。

本書の面白さは、やはり一つには「情報」という新しい視角があるからだろう。外国からの情報メディアとしての海の重要性とか、鎖国による情報しめだしの問題などは、誰もも考えつく問題だとしても、古代において秘めるべきものとされた名が、中世では自己顕示の「名のり」へと転換するという名の意味変化の問題や「語りもの」の問題、遁世者——阿弥——傾^{かた}き——牢人などのインフォーマーの問題、情報を受けとる側のリテラシー(識字能力)の高まりの問題など、やはり「情報」という視角によって面白く展開されることができたと思う。面白いヒントの提示という本書の目的は、十分に達せられたといわねばならない。

しかし、「そういうヒントが新しい日本史学にどう生かされるか」となると、一番問題になるのもまた「情報」の視点である。先端的な現代科学から出てきた情報理論を、史学の方法とどう関係づけるかは大変な問題である。その関係について厳密な理論的

検討を加えた上で、新しい方法論を構築するのではければ、いわゆる「情報史観」が

「新しい日本史学」に定着することはむづかしいと思われる。
(川勝義雄)

梅棹忠夫・河竹登志夫共編

『比較芸能論——日本と世界の芸能』

(日本の古典芸能 第一〇巻)

(A5判、三七八頁、平凡社)

日本の古典芸能はもうあかんのか、いやまだいけるのか、はたまた、日本の古典芸能こそ世界の未来の芸能をさし示す指針なのか、芸能に心を寄せる者にとっては重大問題。だが、わが梅棹先生は全然あかんといわれるのである。曰く、「だいたいあかんのです。日本古典芸能、私はもうぜんぶやめたほうがええ、そういう意見ですね。これはあかん、見込みないです。」「だからこの『日本の古典芸能』、せっかく大全集を出してくだりましたが、これはほんとういったらどうしようもないものや。」私の

ごとき茶の湯研究に血道をあげる人間には何とも物淋しい御託宣である。しかもあかんのは古典芸能ばかりではない。わが日本文化もあかんといわれる。「江戸時代ちゅう時代はえらい時代でっせ。人類史の中で

も、あんなひどい状態は珍しい。出口ないですからね。」その結果できあがった文化はトリビアリズムの極致。それゆえに「口本文化というのはどうしようもないくらいあかん文化になる。」

これは本書冒頭の対談「人類にとって芸能とは何か」からの引用なのだが、対談の相手、比較演劇学の権威、河竹登志夫先生は古典芸能はあかん、などと決して仰言らない。むしろ主張は正反対。近代日本が、これこそ正統の演劇なりと一生懸命やってきたヨーロッパ近代劇が総てあかん、古典芸能こそ近代芸能を超越する芸能の本質を持っている。古典芸能に帰って出直そう、という。この河竹先生の主張の背景には、ヨーロッパにおける演劇の展開、日本のそれ、相互の影響の検討をとおして、より普

遍的な演劇理論への到達という目的意識が働いており、従って、かくあるべしとする文化価値の判断が働いている。ところが梅棹先生にはそれが全くない。あかんものでもそうでなくても一向に痛痒を感じないのである。古典芸能は存在している。我々の生活の何分かは古典芸能に接触している。それがどんな部分を占めているのか、どんなあり方をしているのか見る。これが梅棹先生のいうシンクロニックな芸能の研究である。

『日本の古典芸能』という一歩誤まてば、通になるための入門書となりかねないこの叢書をまことに見事に切って捨てた梅棹先生の「あかん」である。すなわち古典芸能といって特別なことはない。いつてみればボーリングもドライブも皆芸能。学問も芸術も同じ遊びであり趣味である。いわばこういう人間の本源的な要求を芸能という次元で輪切りにして比較してみようといわれるのである。

なるほど本叢書、掉尾を飾るにふさわしいユニークな対談。けだし梅棹先生のみごとな芸能の開陳である。

(熊倉功夫)

会田雄次『日本人の忘れもの』

(A5判、二七八頁、PHP研究所)

甚だ厄介な書物がまわつて来た。然るべき先生方が敬遠されたためかどうかは知らぬが、一番不適任な者に押しつけられた感じがする。

この本は、祖国日本の将来を憂慮する会田先生が、次の時代の指導者として、現在は少くなつたまともな若者たちの奮起を促すために書かれた由である。青年よ劣等感を棄てて自信を持て、日本個有の美しい心をとり戻そう、個性を持った人間になれ、等々の主張が、先生御常套の比較文化的方法とショック療法的発言を駆使して明快に論じられている。但しここで対象とされている若者は「まともで純情だが、気が弱くてこらえ性のない、激しやうい三十代」の人々(私もその一人)、あるいは「中世の僧侶にも似た、社会的には片輪の研究者」の卵らしき私とは違い、主として二十代の人たちを指すようである。加えて私は、先生のような自称悪童から軽蔑される「古

田から北白川界隈の、強いられた義務感から勉強している、大学教師の息子」の一人である——もつともオヤジは、木登りする悪童と遊んではいけないとか、ホホホと手の指の背のほうを口に当てはしなかったが——。

あえて批評不適任者という所以がおわかりただけよう。ただ、研究所の合評会などで会田先生は、「僕はここにおられる人々を対象に書くのではない」といった意味の発言をしたことがあると記憶する。果して然らば、研究所の誰が批評しても先生は痛痒を感じられぬであろうし、まして私ごととき何を書いても叱られないであろうと安心してページをうめることを引受けた。幸か不幸か、私はこの本にまとめられた四四年から四六年までの一二の文章を一つも読んでいなかったで、二七八頁、始めから終りまで楽しく通読させていただいた。もとより、講演↓雑誌↓本書という経過の

ものが多いため、同じ比喩がくり返し出て来ることや、パンチの良くきいているものから、婦人雑誌向きの教養的記事まで、玉石混濁であることはやむを得まい。私にとっては、アメリカの(先生の本意はアメリカだけではないのかも知れぬが)ひからびて形式化し、偽善となり、救いがたい、単純理想主義と道徳を、日本がとり入れることをやめようと訴える「アメリカと日本人」や、会田流論法の好き嫌いは別として、研究・教育に携わる者が考えねばならぬ問題を盛った「青年と教育」、とりわけその中の『ひねり』と『ろくろ』の比喩を使った「若者の不安にどう答えるか」の一章などが参考になった。

著者の分析と指摘は、教条主義的絶対形と異り、必ず一面の真理をうがっており、次から次へとくり出される比喩・思いつきの卓拔さ爽快さと相俟って、かなりの説得力を持つと思われる。しかし、「忘れられた日本の心にたちかえり、そこから自信を持って出発せよ」と言われても、具体的にどう手を下し、行動するかと言う点に話をつきつめて行くと、「これだけ言ったのだから、そこは若き君たちで察しなさい」と

会田先生は消えて行かれる感じになる。同じような傾向は、「大学教師や研究者たちの多くは、真の意味での教師や研究者でない」と、コテンパンにやっつけたあと、「このことは、その一員である私も含めて反省しなければならぬ。」と逃げられるところにも見られる。「俺は何でも判っているのだが、しかし云々」とことわって逃げるスタイルは、先生が攻撃される「女性的大学教師」的性格とみる人がいるかもしれない。内実はともかく、大学の研究所で研究者

小野川秀美編『民報索引』上、下

(B5判、三九五頁、四〇三頁 京大人文科学研究所)

得民報索引 欲察其休用 不若頼旧知
旧知則慮 依下卷附録 欧漢对照表
慮 亦路索 不得不感乱 試引路索項
如孟子路索索資霍而

皆以惻隱之心立極

三高でから三十年、久しぶりに漢文に接して、柄にもなく昂奮、ひとつヤツタルデェと、和臭おんぶんの字をつらねてきたものの、もう限度である。和文に戻ろう。

となっている者の立場から口はばつたいことを言うと、会田先生の議論が、本当に力強い説得力を持ったためには、やはり、研究者としての自信に満ちた姿の先生が、無言で立っておられることが必要なような気がする。過去には、否つい最近まで、そうした自信に満ちた研究者の幾人かに接することがそう困難ではなかった。願わくは、先生自らが真の研究者とは如何なるものかをお示しあらんことを。

(梅原 郁)

漢欧对照表をたよりに右の文を訳せば、
「孟子・ルソー・ショウベンハウエルの如きは、みな惻隱の心をもって極を立つ」とでもなろうか。

ショウベンハウエルは知らず、他の兩者に關する限り、わが意を得た。この文の出所は章炳麟の「五無論」、さすが達識の言と言ふべきか。

索引をくるだけでこれだけの知識が得ら

れる。中国以外の国の書の索引の場合どうであろうか。ルソーの項を引くと、大抵の場合、頁がずらっと並べてあるだけ。もうひとつ親切な「分析的索引」でも、ルソーの項の中に、「——と孟子」××頁、「——とショウベンハウエル」△△頁、「——のビティエ」○○頁とあるのが、せいぜいであらう。そして、人名の場合はまあまあとして、事項と關係づける場合はまま恣意的となるのを免れまい。

中国流の索引の親切さは明白である。それは何に由来するのか。言うまでもなく、当該語を含む一節全体を引用する、という方法による。

これは、中国流索引にドミナントな方法だとのことだが、引用をどこからどこまでで切るかは、かなりの難問題なのではないか。たとえば、

其書之價值殆不讓盧騷之民約論

とあっても、この「其」が何を指すのか不明で、その限りでは不親切である。また、

盧梭之說則謂政府国会裁判所皆為

獨立機關

とするのは、汪兆銘の「希望滿洲立憲者盡聰是」から引いたものだが、これではルソ

ーとモンテスキューーとが異なることになる。疑念を抱いて『民報』本文を借覽してみると、これに続いて、

而国会立乎二者之上而統攝之

とある。ここまでの引用なら、ルソーの真意により近く、迂により親切だったろう。

以上の二点は、限られたスペースとたかう編集者諸兄の苦勞を知った上での、また、索引は本文あつてのものとの常識にあえて抗しての、ヒイキのヒキダオシ的望蜀

小野信爾・吉田富夫・狭間直樹

『革命論集』（中国文明選 第一五卷）

（B 6 判、四三七頁、朝日新聞社）

中国近现代思想史をその原典に即して翻訳・紹介する試みがここ数年行われるようになった。われわれはこの種の書物としてすでに数冊の本を手にすることができる。

この書の新しい試みは、まず原文を提示し、辛亥革命以前の漢文については、読み下し文を添えた上で、翻訳が加えられていることである。思想史上に輝く論著の精髓の原文をちょっと見てみたいと思う読者にとっては、居ながらにして、解説つきで読

の言である。

ともあれ、中国流の索引に比すれば、西欧のそれも日本のそれも無味乾燥である。中国を範として改善を、と考えないでもないが、これまたスペースを考慮すると、無理な相談のようである。かくて、漢字・漢文へのコンプレックスいやますばかり、思えばこの書評、引受けるのではなかった。

（樋口謹一）

める便利な本である。段落ごとの解説、注釈も古典にも通じた専門家の手になるもので、実に深切である。まさに至れり尽せりという他はない。ただ原文の返点は読み下し文がある以上、親切が過ぎた感もないではないが、如何なものであろうか。

太平天国から文化大革命まで収録する論文一二篇、この一〇〇年以上にも及ぶ時期のそれぞれのエポックの代表的な論著を一冊の書にまとめ、しかも読者をして、そこ

に貫れる一筋の赤い糸を感じさせるような論著の選択は実に困難なことで、編者の苦心が察せられる。

この一書、『革命論集』の名にふさわしく、各時期での傑出した革命的思想家の情熱がほとばしり出で、しかも解説者に人を得て、それらの一つひとつが生き生きと甦っている。

およそこの種の編纂物の「書評」というものは、その編集・解説のしかたについてなされるべきであろうが、ここでは興味をもって読んだ「大同書」の婚姻についての康有為の主張を紹介しておきたい。けれどこの問題は人類の歴史とともに古く、しかもなお現在に至るまで問題の清新さを失わないであろう。

康有為の構想するユートピアたる大同の世において男女の關係はいかにあるべきか。曰く、「情志相い合すれば、乃ち合約を立つ。名づけて交好の約と曰い、夫婦なる旧名を有するを得ず」、「男女の合約は当に期限有るべく、終身の約を為さず」、「男女は平等にして各自独立す。復た合約すと雖も權（一欲）を為すに過ぎず、其の財産に至りては各おの相いまじえず」、「かりにもし

永遠に懺悔する者有りとせば、其の頻頻と続約し、相い守って終身するをゆるさん。但だ必ず当に人情に因り、其の自由にまかすべきのみ。」何ともラディカルな主張ではないか。立憲君主論者として革命派に敵対し、終には儒教の国教化を主張する迄に至ったその反動性の故に、その前半の革命的主張には盲目であつた私には、まさしく瞠目の思いである。

中国革命はいうまでもなく、帝国主義支

会田雄次『日本の風土と文化』

(B6判、二七五頁、角川選書)

配のそのただ中から、半植民地社会における民族解放民主主義革命として遂行された。したがって革命的思想家、前衛党の帝國主義、一般的には世界資本主義、特殊的には日本帝國主義、戦後のアメリカ帝國主義に対する認識は重要な意味を持つと思われるが、この書においてはその側面の論著が少いような気もするが、限られた分量の中に、ここまで望むのは欲ばり過ぎであろうか。

(副島門照)

たんに人間の経済生活の面を対象とするからではなく、経済学の方法によって人間の歴史を語ることで「経済史」という独自の分野がなりたつとすれば、それは本来の「歴史学」とはかなり異つたものであるにちがいない。私はみずから経済史を学び、考へながら、つねにその彼岸にある歴史家たちを尊敬しうらやんできた。会田雄次氏が「四角ばつただけの論説なら、書くのも読むのも無意味だ」と宣言し、「ばかばか

しい身辺の雑現象から手当たり次第に問題にしはじめる」ことによって、日本および日本人の特性をえがきだせるとした時、氏は歴史家であることの特権を主張したにちがいない。

『日本の風土と文化』と題するこの評論集は大きく四つのパートからなっている。これらはいずれも「日本人が日本人となり、日本が日本でしかない個性と独立性を具

した国となる」ために、日本人自身によつて日本を再発見しようとする、氏の一贯したテーマでまとめられている。なかではとくに、日本の文化を、ヨーロッパの公共文化・表文化に対する私的文化・裏文化として把握し、それを風土とくに土地生産性の極端な相違から説きおこす第一部「表文化と裏文化」は、氏の専門とかかわりながら、読者を引きこみ考えさせる。だがそこでは、かつて名著『アロン収容所』において、近代ヨーロッパを切った刃が逆に日本にむけられている。

表に對し裏といひ、公にたいして「隠居的、すなわち私的文化」といふとき、ここでは両者は單なる對稱・對立ではない何らかの価値基準によつて對比せられている。氏が「中國やインドとちがつて、日本の歴史はドイツやフランス、イギリスなどの歴史と驚くほど似通つた發展をしている」にもかかわらず、両者が「何か一つのものの表と裏、あるいは陽と陰というような意味で、まったく對立するところが、基本として存在することに気づいた」時の座標は、逆に、裏であり陰である日本が、なぜヨーロッパと類似する歴史を歩みえたかを問ひなおす時、どのように作用するのだろうか。

經濟發展論的な經濟史理解は、一時の土地・資本・労働の数量的モデルから、風土・文化をも考慮のうちに入れた歴史モデルの方向を必要としてきている。この時にあ

梅棹忠夫・加藤秀俊・小松左京・米山俊直・佐々木高明

『日本人のこころ』——文化未来学への試み』

(B6判、二二七頁、朝日新聞社)

『朝日新聞』の「こころのページ」に昭和四四年から四五年に半年ずつ二度にわたって連載せられたものの集録である。著者たちの討論ないし放言を腕ききの新聞記者が筆録して文章に作ったものという。じつに威勢のよい言葉が次から次に跳び出してくる本である。著者の一人一人がなかなかの論客である。その論客たちの放言の中からエッセンスをすくい取った上で、それをうまくつないだのだから、かくも相成るうかと感心するばかりである。いかな論客でも、一人で書いたり喋舌ったりしたのでは、もう少し穩かになったことであろう。

私は、じつは、新聞に連載されたときは、ほんの二、三回しか読んでいなかった。惜

たって、われわれは歴史家と手をむすんでいけるのであろうか、あるいはなお当分一人歩きをつづけねばならないのであろうか。

(山本有造)

しいことをしたと思つてたら、ちかごろ「続・日本人のこころ」の連載がはじまつたので、すぐとびついた。ところが、この本ほどの感銘はうけない。しかし、それは「続」の方は質が落ちるというわけのものではなさそうで、一週間おきにコマ切れて読んだのでは、盛り上りがないということの様に思われる。

その盛り上りや威勢の好きの、由つて来る所は、明らかに、副題の示す「文化未来学への試み」なる著者たちの立場にあると言いたい。眼まぐるしく移り変つてゆく現代社会にあつては、今日、不変の基準と考へられているものも、明日は過去の殘滓となり果てる。そう言つたものを、この本は

「近代遺制」と呼ぶ。封建遺制という言葉はイヤというほど聞かされた時期があつたが、近代遺制とは、私には全く耳なれない言葉であつた。

近代遺制として著者たちによつつけられるものは、現在ではまだ強力に根をはつていて、むしろ通念とまで考へられているものが多いのだから、著者たちの觀察や指摘、あるいは將來への提案は、全くドキリとさせられるものの連続である。たとえば、正月の伝承行事や葬式が家族的行事から社会的行事になつてきたこと、日本人の肉の食べ方は魚のそれから來ていること、われわれを縛る性道德は儒教とキリスト教との野合による近代主義によつて作られたことなどの指摘、それからゴマスリの礼賛、アングラ・ユニバーシティの提案など、「ウー」と唸つて感心するばかりで、私のように旧い道德教育でしつけられた者にはかなり刺激の強い本である。

「続」ともなれば、いちだんと調子がついて、もっと刺激の強いものになることと期待して、進行中の『続・日本人のこころ』の重ねての成功を切に祈りたい。

(藤枝 晃)

わたしは夢想を語る

— 一九世紀フランス社会思想の研究 —

阪上孝

ブルードン主義とは何であるのか。膨大な著作を遺したこの思想家は、自己の輪郭をあらわにすることを頑なに拒んでいる。個々の要素が明らかになるほど、その全体の枠組はわれわれから遠ざかってゆくように見える。碩学ブーグレは、ブルードンを変身の神プロテウスにたとえ、その分類不可能を述べた。この変幻自在さは何に由来するのか。

「わたしの不幸は情念が観念^{イデア}とまじりあうことです。ほかのひとには光明を与える光がわたしの身を焼くのです。」一八四八年四月、かれは論敵ルイ・ブランにあててこう書いた。観念によって現実を把握し、二月革命を導こうとするかれは、冷静さが必要であることを承知しながら、冷静たりえない。辱しめられ虐げられた人民との一体感、加えられる中傷への腹立ち、権力の不正への怒りが、かれの身を焼き、行動に駆りたてる。かれは

強いられて政治行動に入りこみ、「太古の巨人」(マルクス)のようにチェールに対峙する。

ひとつのエピソードがある。一八四八年十一月、F・ピアなる人物が議会の廊下でブルードンを面罵した。恐ったブルードンはピアの頭を殴りつけた。ピアは決闘を申し入れ、ブルードンは後悔しながらも受入れた。十一月三〇日、二人はブローニユの森で対しあうが、国会議長派遣の使者により分けられた。翌日かれらは再会し、ピストルを二発ずつ撃ちあうが命中しない。立会人が二人を握手させる。「ぼくは決闘などという大変な愚行をしでかした。……ピアとぼくは二五歩を隔ててけものように撃ちあった。ぼくたちは握手をかわした……二度と口をきかないために。」同じ日の日記に「滑稽で馬鹿げた喜劇」と記している。ここに、自分の理論的主張とは完全に無縁な愚行に、後悔しながらもひきずりこまれてゆくブルードンの姿がある。

「わたしは夢想を語る。……わたしは意に、反して、国民の夢遊病にひきずられた一思想家の物語りをつづけるだけだ。」(『一革命家の告白』)ここで語られているのは思想よりも夢想なのだ。しかもこの夢想は意に反して状況にひきずられた結果なのだ。とすればこの思想家は、語の厳密な意味で思想家の名に値いするだろうか。

ルソーは自分を迫害する外界との関係を断ち、内なる世界に沈潜して、『孤独な散歩者の夢想』を書いた。プルードンは人民の夢遊病的状況にひきずられながら夢を語る。ルソーの夢想が内界を見事に映すとすれば、かれのそれは移ろいゆく人民の熱情と結びあう。そこにあるのは確立された明晰な思想よりもむしろ人民の無定形な希望、情念ではないのか。かれが不幸とよんだ事態がプルードン主義の根強い生命力ではあるまいか。

プルードンの思想の個々の要素に考察を限定することをやめるとき、われわれはこのアモルフな希望に直面する。そのとき、われわれは出発点に回帰する——プルードン主義とは何であるのか。

現代の家族問題

—家族問題研究—

明 山 和 夫

当研究会は、当初「親子問題の研究」という形で、親子関係の法制度の上での成立に関する問題その他をかなり広汎に取り上げていたが、その後、扶養、とくに親子

間の扶養という法学的問題と家族社会学で最近問題となってきた核家族論との絡み合う諸論点を何回も取り上げ討究するプロセスを重ねてきた。マードックの核家族に関する準古典的デフィニションとは少し離れて、わが国ではそれは価値関係の問題として論じられてきている傾向であるけれども、核家族（の孤立）を家族生活様式その他もっと広い文化的、社会的視点からどう評価するかによって、従来家族法学者のいつてきた扶養義務の二種別としての生活保持義務と生活扶助義務との区別の有用性とその度合という問題の考え方が左右される面や老人福祉のあり方にも関連して来る面があり、問題は短期で解決するには余りにも巨大であることが痛感された。他方又、技術革新とそれに後続する社会過程のサイクルなど社会変化がいわゆる核家族にもインパクトを与え、引いては家族の崩壊をも招来するに至らぬかといった未来社会学上の問題もザインの問題として没価値的に捉えていかなければならないし、これらの焦点を一層精緻に追究していきたいものである。

なお、当研究会では、右研究の一環として、昨今問題とされてきている老人問題にも親子問題の一側面という意味で研究するため、文部省科学研究費の助成を受けて取り組んでいる。老人問題に関しては、その客観的な実

態調査という面だけでも政府関係のものを始め色々のものがあるけれども、親族扶養という視点からその実態をとくに都市的地域についてある程度広汎に捉えたものはまことに寥寥たるありさまであったので、われわれは京都市内の一定区域につきその実態調査を試みている。扶養をなしている者とそれを受けている者との両面にわたる調査である点、それも広く親族扶養という広いディメンジョンでアプローチしている点に特色をもたせている。要扶養老人をめぐる在来の扶養慣行には、中・若年層における扶養意識の変化や社会保障体制の発展と絡んで色々の問題が内含されており、その間の最近の実態がかなり捉握可能であると思っている。加えて、主として家族生活に関する老人たちの見方、考え方をできるだけ非断片的に実態捉握して、数量化しメカナイズされている在来のこの種の調査の不備を補う意味もあって、一般老人や老人「いこいの家」登録老人を対象として具体的な所見ないし感想を求めるややユニークな調査をも併せ実施しているの、老人問題に関する在来の調査とはいく分か変わった実りある結果がもたらされ得るかと期待している次第である。

『大正期の急進的自由主義』 の刊行にいたるまで

— 大正・昭和初期の時代思潮と世論 —

渡 部 徹

班研究の研究報告の原稿を近日、出版社に渡すところまでこぎつけた。九月に六〇〇ページ近くの本になる予定である。本のできばえは、評者にまかせるとして、ホッと肩をおろした気持なので、とりとめない、うらばなしをしておこう。

この班研究は研究所の公式記録では六九年四月から七三年三月までとなっている。じっさいは、計画は一九六六年秋にたてられ、ただちに準備に入って、今日におよんでいるのである。しかも、計画は苦肉の策としてたてられた。

御記憶の方も多いと思うが、文部省科学研究費「特定研究」の「日本近代化」が一九六六年度からはじめられた。研究所でも、井上清を代表者として「大正・昭和初期の近代化の特質」で、四年間、交付金をうけた。

そのさい、初年度の応募にあたり「特定研究」の内容

・総予算がどうなるのかよくわからなかったため、私が主となって作成した計画は、年一千万円にのぼる壮大なものであった。ところが、審査の結果、計画が大きすぎると、計画中の一つの柱にすぎない「時代思潮と世論」——これは坂田教授の発案——の部分だけを採択するとして、計画の変更を指示されたのである。

幹事を担当した私は、もともとこれは坂田班の課題と思っただけに面喰らわされた。しかし、研究費の交付をうける以上、この課題に即した研究報告をださないわけにはいかない。かくて、羊頭狗肉のそしりはまぬがれないとしても、「時代思潮と世論」の一側面ということで、結果のまとめやすい『東洋経済新報』と『大阪朝日』社説を柱として研究しようということになった。班のみなさんに課題を押しつけ、ひきまわすことになったのも、このいわば外圧の結果と、御容赦いただきたい。

こうして、六七年はじめから『新報』と『大阪朝日』社説の電子複写・マイクロ焼付によるカード化作業に着手し、七〇年一月より、研究会での討論に入った。一つはこの特定研究の期間が終っていること、もう一つは資料的研究は一气呵成に短期間に凝縮した方がやる気を失わないことを考慮し、これまた強引に昨年末に原稿提出を義務づけたしだい。

私自身については、丁度、同じ期間に『堺市史』の原稿の作成が並行、心身ともくたびれはて、まがりなりにも両方を片づけようやくいまホッとしたところである。

(一九七二年四月八日)

不満ふたつ

——朱子研究——

島田虔次

私はワイワイガヤガヤと賑かなことが好きである。研究会でも、誰かの権威ある発言を、一同しずまりかえって傾聴する、というお通夜型を好まない。先輩後輩いりまじって口角泡をとばすのが、よい。朱子語類の会は残念ながら、まだ幾分、お通夜型に低迷しているように感ぜられる。

大体、京都というところは、朱子学の研究には大変好都合な環境だと思う。それは、徳川時代以来の日本朱子学の伝統から、一応、切れてしまっているからである。中国の朱子学を中国の朱子学として研究するには恰好の土壌である。君も僕もチヨボチヨボという状況で、何の

臆面もなく、大いに闊達な討論ができる筈である。

もっとも、こういうことが一つある。語類は中国語史の資料としても有名であるだけに、語学的に正確に読むということが先づ大問題、大必要である、いきおい、その点にのみエネルギーが集中する、思想内容的な討論にまでなかなか進めない、ということ。しかし、過去二年間の経験で、朱子思想としての脈絡を頭においていないと、語学的にも正しく読めない箇所が少なくないことは、誰しもの感得されたところであるに相違ない。大胆にそこへ踏みこんでの議論が湧くことが切に望まれる。

文学の専門家もいる。歴史家もいる。老荘家もいれば科学史家もいる。柳田聖山氏のような禅宗史の大家もいる。さらにまたさいわいなことに、上山春平、山下正男という西洋哲学、西洋論理学の専門家も参加している。

この御二人、いつまで続くことやら、と最初は危なかしがっていたが、案に相違して、ほぼ皆勤に近い。もっともと百家争鳴の風があってもよいのではなからうか。もちろん若い人の中には、ただただ聴講生のつもりで末席にかしこまっている人もあるであろう。然し、ものを言っているという法はない。

不足をならべたついでに、もう一つ。それは朱子班の研究会の進行とともに痛切に感ぜられてきたのであるが、わが研究所の書庫が日本、朝鮮の儒者、目下の関心

に即していえば朱子学者の書物を余りに欠いているという点である。詳しく論じないと、さきに言ったことと矛盾するようにとられるかも知れないが、決してそうではない。仁斎、徂徠はあるが闇斎はなく、李退溪も李栗谷も一切ないというのは、甚だ困るのである。もちろん、そのような禁欲、否むしろ潔癖、があつたればこそわが書庫の今日はありえた。その点、先輩にどれだけ感謝してもしすぎることはない。然し今日のわれわれとして、この不備を一口も早く補わねばならぬ。

『人文』はPR雑誌だといった人がある。だが、声聞の情を過ぐるは君子これを恥ず、とか。結構すぐめもしらじらしい。それゆえ、以上、不満ばかりならべた。幸に咎めざれ。

いそがしい、いそがしい

— アフリカ社会の研究 —

米山俊直

梅棹忠夫班長の主宰する三つの社会人類学関係の研究班には、どれにも世界各地のフィールドワークの経験者

がいる。ひとつの事象が話題になると、たちまち世界中の実例が紹介されることがよくある。それが、強力な研究の推進力になっているわけだ。

しかし、比較文明論（と通称する）「文明の比較社会人類学的研究」の班も、現論人類学の班も、看板だけみるとどこにでもありそうなアームチュア派的思弁的研究のグループのように受けとられるかもしれない。アフリカ社会の研究班だけが、アフリカという特定地域を明示しているので、よりフィールド派の印象を与えるかもしれない。

事実、京大のアフリカ研究は、人文科学研究所と理学部を中心にしてすすめられてきた。その十年をこえる伝統を継いでいるのが、この研究班である。七一年度も、班員の江口一久、掛谷誠、端信行および和崎洋一がアフリカに行った。それぞれ、あたらしいフィールド・データをかかえて、元気で帰ってきた。いずれその成果は、この研究班の栄養になるはずだ。

フィールドに出なかったほうも、あわただしい日を過している。Kyoto University African Studiesは、事務局の窪日道子さんの奮闘もあって七一年度末にその第七巻を刊行した。この欧文の刊行物を契機にして、班員たちの仕事はいまや海外に広く紹介されるようになった。

ロンドンの International Institute of African Studies

から隔月に刊行されている African Abstracts の最近の各号には、班員のどれかの論文が、かならず抄録されている。先年アメリカで、バラバイーガ族についての本が出版された。バラバイーガは梅棹忠夫らの研究したダトーガ族の支族である。スイスから出ている Anthropos の書評はこの本をとりあげ、かなりきびしく批評した。批評のひとつの根拠は、このアメリカの本が日本人の研究成果の参照をおこたっている、ということにあった。

梅棹班長を編集委員にふくむ朝日講座「探検と冒険」の第一巻は、梅棹を担当編集委員とし、編集補佐に石毛直道、端信行が加わって、「地域講座・アフリカ編」が編まれた。他の班員も執筆に加わっている。書評では、「いま日本で手に入る最良のアフリカ文献」とあった。みんな気をよくしている。

日本アフリカ学会の学術大会は、長崎大学で開催され、班員も参加した。学会はお客で行っているかぎり楽しいが、当番となると大変だ。七二年春の学術大会は京都で、班長を実行委員長として開催される。その準備も忙しい昨今である。

東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所は、三度にわたってアフリカ研究のシンポジウムを京都で開催した。これにも、ほとんどの班員が参加している。班員

だった福井勝義は、その研究所の助手になった。

アフリカ研究に関心をもつ内外の研究者との協力、研究成果の公刊、新しい現地研究の推進、そして若いこのジャンルの研究志望者の育成と、この研究班のになう社会的な責任は大きい。これまでの十年をふまえ、これからの十年を、より充実した研究活動で果たしてゆくのが、この班の仕事といえよう。ああ、いそがしい。

「不覚」のつぶやき

—隋唐の思想と社会—

興膳 宏

私のように長い問外典とのつきあいしかなかった人間にとって、仏教の論理はいかにも煩瑣でまわりくどく、いまだにもどかしい思いをしているのだが、その代りときどき妙なことでひどく感嘆を発することがある。これはその一例——

梁の劉勰の『文心雕龍』時序篇は、時代と文学とのかわりを論じた章だが、その基調は次の一節に集約されているといつてよい。「故に知る歌謡文理は、世と推移し、風は上に動きて、波は下に震う者なり」。十年ほど

前、中国の学界で『文心雕龍』をめぐる論争のあったときも、劉勰の理論に積極的意義を認めようとする論者は、かならずこの一節を引用して、社会（風）から文学（波）への働きかけを正しく把握した認識として評価したものである。そして私など、このレトリックは、劉勰がよくやる古典の語を借りたモザイクでなく、彼独自の創出にかかるものと信じて疑わなかった。

だから『大乘起信論』を読んでいるうち、真如と無明の関係を海水と風に比喻した一段に出会ったときは、ほんとうに驚いた。曰く、「大海の水、風に因りて波動き、水相と風相は相い捨離せず。しかれども水は動性に非ず、もし風止滅すれば、動相則ち滅し、顕性壊れず」。荒牧さんの教示によれば、風と波の比喻は、『楞伽經』にも見えるということである。しからば仏典においては、一種の常套的な比喻なのかもしれない。

しかし考えてみれば、劉勰は少時から僧祐に養われてその書記をつとめ、『出三藏記集』の編集にも彼の手が加わっているというほどの人物だから、それくらいの比喻を援用するのは異とするに足るまい。『起信論』はもちろん劉勰死後の訳だが。要するに外典の世界しか頭がないこちらが至らなかつたのである。それでもなおかつ私が興味深く思うのは、唯心論そのものに依拠した作者の発想が、文脈の中にあつては、確かに唯物的思考の

側面を示すものとして読みとれる皮肉さである。

ついでにもう一つ『起信論』の感想を記せば、菩薩五十二位という菩薩の修業段階の規定も、私には脅威だった。十信から始まって、十住・十行・十廻向・十地とせりあがり、それぞれがまた十の段階に分かたれる。これでは、私どとき「不覚」のともがらに最初から発心をあきらめさせるようなものだ。何だか望遠鏡を逆さにしてのぞいているような感じなのである。

辞令書の習作

—白氏文集—

平岡武夫

今日のわれわれが受けとる辞令書は、きわめて簡略である。「何々に任命する」「願により何々を免ずる」と、一行にも足らぬ、タイプ文字だけである。しかし唐代では、他の王朝も同じであるが、辞令書はそう簡単ではない。文章が上手で、見識のすぐれたものを特別に選んで、そのものに天子に代って文を綴らせ、詔勅として与えられる。筆者は、任命しようとする官職が現時点に持つところの意味を述べ、被任命者の人物・履歴・能力を

述べ、その後にこの任用によって期待される効果を述べる。もとより類型はできているけれども、筆者の問題意識・価値判断・文章の優劣が現われていて、まさしく文学の作品なのである。それ故に、文集を編集する時には、かならず組み入れて、誇りとする。

歴史学者にとっては、これらの詔勅は、それぞれの時点における各般の問題や登場人物について、歴史の記述を補う場合があるので、重宝な資料とされている。

白氏文集研究班は、このごろ、この詔勅類を読んでいる。

卷三十八の第一篇は杜佑致仕制である。これだけ見ている段には、何ら特異なものはない。しかるに、旧唐書の杜佑伝に、別の致仕制が記載されていて、内容がまったく異なる。これは奇異なことである。本伝の詔が正式のものであろうが、それならば、文集の作品は何なのか。奇異なことはまだある。杜佑の致仕は元和七年六月のこと。当時、白居易は翰林学士をやめ、故郷に帰って母の喪に服していた。天子のために詔勅を書く地位にはいなかった。しかるに、白氏文集には杜佑致仕制が存在している。これは何としたことか。

岑仲勉氏は、これらのことを矛盾と見た。そして白氏文集の作品を偽作として抹消しようとした。しかし、それは誤まっている。文集の作品はまさしく白居易の作品

である。それは彼の習作なのである。高位顯官を極め、しかもすでに高齡に達して、その引退時期に世の人の関心が集つていた杜佑のことである。いよいよ引退ときまれば、文筆に自信をもち、翰林にあこがれるものは、たいてい筆を執つて文をなしたことであろう。もともと、致仕制を書くことは、この大官の生涯を総括し批判することであるから、それぞれの立場から、その見識に従つて文をなしたことであろう。それらのうち、正式のものが旧唐書に、習作の一つが白氏文集に残つたのである。これらの兩者の内容が異なるのは、作者の文章の力と杜佑に対する評価の相違による。本伝の制は太保致仕としてゐるが、白居易は太子太師致仕にしかしていない。この白居易のきびしさは、用いている字句のニュアンスにも現われているが、それをいまいち紙幅はない。

白氏文集には、この種類の習作が、数十篇ある。金沢文庫本には、はっきりと「擬作」と自注している。宋刊本より後はこの二字を削つてしまつてゐる。この例から推測すると、他の人人の文集の中にも、習作の詔勅が相当地に存在しているのではあるまいか。杜佑致仕の場合には正式のものが存在しているけれども、もし習作だけしか残っていなかったら、杜佑は太子太師で致仕したことになり、それによって彼の伝記や人物論もなされたことであろう。

詔勅を書くことは、文章をつかさどるものの表芸であり、栄誉なことであつた。それは文学活動の重要なジャンルであつた。正式のものは天子の名によつて発表される。その場合には、草稿は焼かれ、作者の名は消えるべきである。作者がそのように処置した場合もあるが、また惜んで保存した場合もある。しかし習作の場合には、却つて文学作品の腕を見せる所として、憚るところなく文集に編集されたであろう。

一般に、文集に編集されている詔勅の類を歴史の資料とすることには慎重でなければならぬ。もともと作者は、文学作品として読まれることを期待しているのである。断片的な利用は、その欲する所ではない。

アッシリア学の将来

前川 和 也

欧米の最近のシュメール文化概論書をいくつか読んでいて、これらの書物のなかに共通して、シュメール社会を総体として把握するための構想力の衰弱が在る、と感じた。辞書学的・言語学的研究が主流を占めている欧米では、行政・経済文書があまり利用されず、また用いられたとしても徹底的な分析・再構成がなおざりにされるために、シュメール社会構造論にかんして、さまざまな弱点が生まれてくるのだろう。けれどもじつは、広義のアッシリア学がいま抱えている基本問題が、さらにその背後に在るのではないか。逆説的な言いかたになるけれども、それは膨大な楔形文書群の存在ということだ。もっとも多く見積った計算によれば、現在までに五十万を下らない楔形文書が出土しているという。そしてその多くは、まだ手写もされずに、欧米各地の博物館その他に放りこまれたままになっているのだ。したがって欧米の研究者たちは、すでに公開された諸文書を辞書学的に比較分析すると同時に、未公開の文書を手写・出版する作業にたえず取組まなければならない。

このような作業を抱えている研究者は、ややもすれば、既

刊の行政・経済文書を研究の中心素材とはしなくなる。そのために、かれらの論考のなかに、ある一定の弱点が現われてくる。たとえば、解釈困難な諸語にかんして、多数の文書を渉猟したじつに精密な研究が行なわれる。にもかかわらず、その研究者が対象としている当のシュメール社会は、総体としてはあいかわらず浮びあがってはこない。

さて、日本にいるわたしは、欧米研究者によって手写・出版済みの行政・経済文書を用いて、わたしなりのシュメール社会像を創ろうとしてきたつもりだ。その一方で、既刊の文字テキストの分析、また未公開文書の手写・発表といった、欧米研究者にとつての基本的作業はできていない。

ところで、シュメール社会構造論をより進めるためにも、これからは、各地に散在している未発表の行政・経済文書を掘りおこすことが必要になるだろう。つまりわたしは、たとえば出土文書の整理・手写を行なわないかわりに、手写された行政・経済文書を分析してきたのだけれども、いつかはこれらをもとに実行しなければならぬわけだ。アッシリア学の本来の定義からすれば、たしかにこれは当然のことだろう。けれどもそのとき、海外の研究者がいま直面しているとおまじく同じ問題がおしよせてくるだろう。膨大な文書整理・手写のための専門知識・技術の修得要求。これにともなうさまざまなじばかりの専門化・細密化。さらにその結果としての、社会を捉える眼・構想力の衰退。これらの諸問題をくぐりぬけて行く道すじを、はたしてわたしたちは見つけることができるのかどうか。空恐ろしくなることがある。

日本帝國主義と辛亥革命

——善後借款を中心に——

副島圓照

一九一一年一〇月、中国における辛亥革命の勃発は日本、とくに支配階級に大きな衝撃を与えた。野沢豊氏の近著によれば、それは中華人民共和國の成立に匹敵するような「近代日本にとって中国との関係における最大の衝撃的事件」であったとされる。

天皇制日本にとって隣国での共和政体の出現は大きな脅威であったとともに、義和団鎮圧以降「極東の憲兵」として、帝國主義的進出をはかってきた日本にとって、その方向がどのような障害を被むるか当初はまったくはかりしなかったのである。政府の対中国政策が二転三転したのはこのことを物語っている。もちろん、いかなる事態になろうとも、最も有効な侵略の道を見出していくという基本的姿勢にゆるぎはなかった。その意味で一〇月二四日の閣議決定は、以後の中国政策に大きな役割をもつものとして重要である。この決定の一つは、「滿州問題ノ根本的解決」であり、「苟モ機ノ乘スヘキアラハ之ヲ利用シ此ノ断案ヲ下スノ手段ヲ講スヘキハ論ヲ待タル次第」とし、他の一つは「支那本部」に対する進出であった。

「清國ニ於ケル事態ハ極メテ安靜ヲ欠キ今後ノ形勢如何ハ何人モ之ヲ予知スルヲ得サルモノアリ而シテ一旦不測ノ変

ノ此地方ニ起生スルニ方リ之ニ対シテ応急ノ手段ヲ講シ得ルモノ帝國ヲ措テ他ニ之ヲ発見スルコト能ハス此事實ハ帝國地理上ノ位地並ニ帝國ノ實力ニ照シ更ニ疑ヲ容ルヘカサル所ニシテ一面帝國ノ東亜ニ於ケル一大任務モ亦之ニ存スルモノト云ハサルヘカラス」

ここにはまさしく東アジアにおける帝國主義國日本の役割がはつきりと示されている。そして、「滿州問題ノ根本的解決ハ一ニ我ニ最モ有利ナル時期ノ到来ヲ待ツコトトシ今後特ニ力ヲ支那本部ニ扶植スルニ努メ……」とされたのである。そして具体的に欧米帝國主義列強との共同による袁世凱政權のテコ入れによる革命の進展の阻止、およびロシアとの協調による「滿蒙」進出の二大方向がとられることになる。前者の具体化の当面の大きな比重を占めるのが四國借款團への加入に他ならなかった。

借款の提供は帝國主義侵略の大きな武器であった。それは財政上から中国を支配し、金融的利潤を引出すという二重の役割をもった。袁世凱に供与された善後借款（「改革借款」ともいわれる）はこのような一般的役割につけ加えて、革命圧殺のために、列強が直接袁政權の財政的基盤を保証するという意味をもったのである。

だが帝國主義國の共同は、それぞれの利権の獲得が第一義的の故に、所詮一時的なものに過ぎない。アメリカはすでに借款契約が成立する以前に六國借款團から脱退する。この借款契約が内政干渉になる条項を含むという自由主義者のポーズをとって。そして借款團そのものも革命鎮圧の目的が

果されるや、やがて解散する。

借款団加入へ至るまでの日本の動き、列強相互間の対立と同盟、そして中国人民のこれへの対応などを、私のこれからの研究課題としたい。

顔元と毛沢東

小野 和子

顔元は清初の思想家。異民族支配のもとで「生民の為に事を介し得ぬ」学問の頹廃を糾弾し、独自の実践主義哲学を打ち樹てたユニークな思想家であった。だが、その学問は、およそ妥協をゆるさぬ朱子学批判と、社会的実践の意欲ゆえをもって、清朝支配のもとにおいてはほとんど絶学とされた。

毛沢東の初期の論文「体育の研究」（一九一七）に、この顔元の哲学にたいする共鳴のみられることは、すでに指摘したとおりである（「顔元の学問論」『東方学報』四一）。その後、たまたま、同じ時期に少年中国学会において活動した李璜の回憶（五・四運動与少年中国学人、明報四一・四二・四三）のなかにこれを傍証する資料のあることを知った。

李璜はつぎのようにいう。「王光祈は毛が理論を軽んじ実践を重んずる青年であることを知った。毛がかれに語ったところによれば、毛沢東は、顔習齋（元）の学問を慕って実行を主とした。毛自身、顔習齋が、異民族防禦のため軍事を研究せんとして長城を周遊し千里の遠きに及んだのを見ならうとした。そこで毛も洞庭湖の周囲が八百里であるかどうか

を検証しようとして、湖の周囲を歩いて一まわりしたことがある。（この洞庭湖の周囲を歩いた故事については、翌一九年四月上海で左舜生に会った時にも話していて、かれ自身大いに自慢の話であったことがわかる）。洞庭湖といえは、京都府がすっぽりはいるほどの大きさ、八百里は約五三〇キロである。これだけの距離を、実地検証のためおそらく十日以上もかかって踏破したのであるうか。

李璜はさらにつづけていう。当時、少年中国学会は「工讀互助」（労働と勉学のための互助組織）を提起し、この方法をめぐってさまざまな議論が沸騰していた。毛は「まずやってみなければ、議論ばかりしているのでは駄目だ」と、自分が銅錢一枚で洋服一枚の洗濯を請負うことを申し出た。そして人びとがあやぶむなかで、王光祈の洋服の洗濯をやつてのけた。のち王光祈が正式に「工讀互助団」を発起したとき、その労働の項目としてクリーニング店が入っていたのは、毛沢東のこのときの思いつきによるものだ、とかれはいう。毛沢東は一九二〇年、上海に行つてのち、クリーニングによって生活を維持したといわれるが（李銳「毛沢東同志初期革命活動」）、おそらくこれも「工讀互助」に関連してのことであつたにちがいない。

このように、毛沢東には、五・四前後、顔元の哲学に共鳴し、且つひたむきに実践を志した一時期があつた。顔元の実践論と毛沢東のそれと——両者をただちに短絡させることはできないにしても、このような事實は毛沢東の実践論の形成を考えてゆく上で、やはり視野に入れておくべきことがらであるう。

人のうごき

昭和四六年二月一日—四七年四月二日

梅棹忠夫教授（西洋部）は、四六年一〇月一七日より同年一月五日まで、民族学関係の博物館視察のため、ヨーロッパ諸国に出張。

藤枝晃教授（東方部）は四二年一月二五日、コペンハーゲン大学より名誉学位をおくられた。

磯波 護助手（東方部）は、神戸大学文学部助教授に転出（二月一日付）

井上 清教授（日本部）は、四七年一月一五日より同年三月二七日まで、西ドイツ、ミュンヘン大学に招かれた。

脇本 繁助手は、停年退官。

筧 文生助手（東方部）は、辞任の上、立命館大学文学部助教授に。

藤岡喜愛講師（西洋部）は、辞任の上、兵庫医科大学助教授に（以上、三月三一日付）

横山俊夫、小南一郎を、助手（日本部・東方部）に採用（四月一日付）

外国人研修員（昭和四六—四七年）

James Zimmerman（米）エール大学 宋代史

Michael Freeman（米）エール大学 北宋の思想

Robert Somers（米）エール大学 韓愈伝

Beatrice Spade（米）ハーバード大学 中国中世文化史

Alfred Bindes（スイス）ハイデルベルク大学 六朝美術史

Agnes David（仏）日仏学館 日本近代文学

Willelm Remmelink（オランダ）ライデン大学 明清思想史

John Wixted（米）オックスフォード大学 元好問の文学理論

論

Donald Wagner（加）コペンハーゲン大学 中国数学史

Hussin Farzeen（パキスタン）フランス高等研究院 道教史

F. G. Noreheller（米）カリフォルニア大学

流動研究員・研修員（昭和四六—四七年）

長谷部好一（愛知学院大学） 近世仏教史

藤井 知昭（名城大学） 東西音楽の交流

高橋 正和（別府大学） 三浦梅園と明清の自然科学

村上 哲見（東北大学） 朱子の研究

松丸 道雄（東京大学） 両周金文の介偽

流沙海西学会賞

前川和也氏

前川和也君は『人文学報』三二号に掲載された論文「シュメールとミケーネ」によって第四回（昭和四十六年度）流沙海西学会賞を受賞された。流沙学会賞は江上波夫東京大学名誉教授の退官記念募金を基金にして設けられ、その前年に発表された秀れた西アジア、北アジア関係の研究に対して与えられている。同君の当該論文は古代メソポタミアのシュメールの経済・国家体制をミケーネのそれと対比しつつ論じたもの。ギリシア史の研究者太田秀通氏は戦後発見解説されたミケーネの線文字史料を分析し、アジア的生産様式論によりつつ、シュメール、ミケーネを発展段階論的に捉える見解を発表しているが、前川氏は経済構造が異なる両社会は発展段階的に捉えることはできないとしている。これまでにシュメールの粘土板史料を研究して、いくつかのシュメール経済についての論文をものしてきた同君だけに、論旨は説得力に富んでいる。これをしおに、今後、国際学界への進出を期待したいものである。

（中村賢二郎）

コペンハーゲン大学名誉学位

藤 枝 晃 氏

It is with great satisfaction that we, Professor Fujieda Akira's students at Copenhagen University, greet the award to him of the university's highest award, the Honorary Doctorate of Philosophy.

The award has been given to Professor Fujieda in recognition of his many achievements in academic endeavors. But for us, his students, it is an opportunity to thank him in a small way for his warm friendship and generous help to many Danish students and scholars.

Denmark is a small country and far away; when we come to Japan we are often poorly prepared to deal with the complexities of living and studying here. But we who study East Asian culture in Denmark have learned that we have a friend in Kyoto who can and will help us in dealing with government and university authorities. On more than one occasion he has even been willing to break the law for his Danish friends.

"Within the four seas all men are brothers", and we Danish students look with pride to our elder brother, Fujieda Akira.

Donald Blackmore Wagner

representing the students of
The East Asian Institute,
Copenhagen University.

人文科学研究協会助成金

財団法人・人文科学研究協会は、広く世界文化の人文科学的研究を奨励するために毎年、若手研究者を選んで助成金を交付しているが、昭和四六年度は山田明爾氏と岩村登志夫氏が選ばれた。

山田明爾氏

昭和四六年度の受賞者である龍谷大学非常勤講師山田明爾氏は、仏教がインド、西域、中国を経て日本に伝播した過程を歴史的に跡づけることをとくに研究対象にしている。従来の研究態度が、教理史、美術史を各々独立して扱うことにあり、仏教のない仏教美術史、造形美術を一顧だにしない仏教教理史であるのに対し、仏教を専攻し、仏教図像学へと研究対象をひろげていった彼は、仏教の伝播過程を根本的に追求するためには、教理の変容だけをおっていても、また図像学だけの知識で検討しても、それを十全に把握理解することができないことを常に指摘する。造像遺物をくわしく観察して、その中の変容をとらえることと教理を分析してその変容を抽出することは表裏一体の研究態度であるはずである。とくにアフガニスタンにおいて彼と同道した私は、その観察の綿密にして鋭いことに

驚嘆した。その研究は、中央アジアから中国にわたる文化伝播を考古学上から扱う私たちにも益するところが大きい。

(桑山正進)

岩村登志夫氏

岩村登志夫『日本人民戦線史序説』は、日本における人民戦線ないし人民戦線運動の存在を軽視してきた研究史に真正面から挑戦した野心作である。著者は、本書収録の主論文「小岩井浄論」執筆の動機が学生時代の『赤旗』復刻版の研究会にあったと回想しているが(『出版ニュース』一九七一年七月上旬号)、一〇年余の歳月がこの論文に費された成果は十分にみのったといえよう。

著者の意欲が大阪地方の労働運動史の克明な追及に注がれ、三二年テーゼの軍封帝主義論の再検討にまで及んだことは、通説挑戦の迂回作戦を成功に導いた。記録文献と関係者のききとりとの整合も、精力的にすすめられた。著者は、長く大阪府立旭高校の教壇にあり、そこで激烈な動評闘争・安保闘争などを経験しながら、本書収録論文のほとんどを執筆したという。もしも、著者が大学卒業後すぐに大学の研究室にとどまっていたならば、果して、本書は生まれたであろうか。著者の一見、学界の動向から「超然」とした粘り強い迂回作戦は、研究室では封殺されたかもしれない。著者の受賞に心から喜びの意を表するものである。

(渡部徹)

旅

フンメルとムール

梅 棹 忠 夫

日本でも民族学の博物館をつくろうという話は戦前からあったのですが、なかなか実現しないまままで今日にいたっています。昭和四七年度によく調査費がついて、文部省内に「民族学研究博物館に関する調査会議」というのが設置されました。諸外国ではどういふふうに行っているか、まずそれを調査しようということになった、昭和四七年度はわたしがヨーロッパ諸国をみてくることになり、文部省学術課課長補佐の乾侑氏と二人で出かけました。一〇月から十一月にかけて、スエーデン、ノルウェー、西ドイツ（ベルリン）、フランス、ベルギー、イギリスの六カ国をかけ足でまわってきました。

博物館はたくさんみましたが、その話は別の機会にかくことにして、きょうはたいへん印象のつよかった二つのものについて報告します。どちらも、たべものです。

スエーデンといえば、すぐにスミールゴスボードつまりオーブン・サンドイッチをおもいだしますが、感動したのはそれではなく、

お客さま

ジョルジュ・フリードマン氏

（パリ大学教授）

一月一七日、フランスの社会学者ジョルジュ・フリードマン氏が研究所を訪れ、公開講演を行なった。氏は主に産業社会学の分野で様々な活動をしてきた人であるが、この日の講演の題目は「技術進行——自由と隷属」。技術文明の発達をめぐって、いくつかの問題提起がなされたが、こうしたテーマの所為か、集まった聴講者の中にも、工学部などの学生が多かった。

フリードマン氏の述べるところによると、前世紀の終りから今世紀はじめにかけて、ヨーロッパでは技術の進歩に対する楽観的な考え方が専らであった。これが崩れはじめるのは第一次大戦後のことであるが、その崩壊は第二次大戦を経た今日では決定的なものとなった。フリードマン氏は「進歩の観念」を内容から見て、科学的、技術的、社会的、倫理的——の四つに分類したうえで、それぞれに内在するあやまちを指摘する。

結論としては、進歩に対して盲目的になるのは勿論よ

エビなんです。一〇センチばかりのエビのさつとゆであげたのを、ガラスの縁にならべてひっかけてもってきます。手でむきながら、ちょっと塩をつけてたべます。ほんとに新鮮で、うれしくなつて一人で三〇ぴきもたいらげてしまいました。

名まえをきくと、食堂のボーイさん、hummerとかいてくれましたが、すこしフにおちない点があります。ドイツのHummerおよびフランス語のhomardと、おなじ語源の言葉だとおもうのですが、これはどちらも、わたしの知っているかぎりでは、ウミザリガニのことなんです。エビならなんでもhummerでかたづけるのでしょうか。

もう一つの大感動は、ブリュッセルででした。ホテルのおやじに、この町の代表的な料理は何かときくと、言下に、Moules et frites!とこたえました。じっさい、ムール屋がいっぱいならんでいて、どこも満員なんです。

moules というのは、日本語では貽貝（いがい）といいます。英語は mussel です。ドイツ語では Miesmuschel ですが、ただ Muschel (貝) といえば、ふつうこれのことです。殻は小型のカラスガイみたいな形と色ですが、肉はうつくしい黄色で、やわらかく、おいしいものです。

ヨーロッパどこでもたべますが、ブリュッセルのはすごいです。白ぶどう酒でセロリーといっしょにたいたものを、キャセロール(なべ)ごともってきます。肉をつまんで殻をすて、つまんではずす、つまんではずす。たちまちぐろい貝殻の山ができます。frites というのは、もちろん「あげいも」ですが、さすがに moules 一なべたいらげると、いもにまでは手がでませんでした。

ろしくないが、だからといって悲観的になるべきでもない。進歩そのものは人間の隸属ではなく自由の可能性を意味しているのである。そのためには今こそ、道徳を伴った社会的制度の改革が必要である、ということであった。道徳(モラル)というものに寄せられている古風な信頼が特徴的であった。(多田記)

G・N・カラランジャ氏

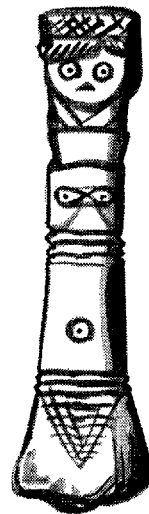
(ナイロビ大学学長)

東アフリカ・ケニアの唯一の国立大学であるナイロビ大学学長G・N・カラランジャ博士が十一月二二—二十四、京都大学を訪問。京大総長は組合との団交とかで手がはなせず、河野所長と面会。あと梅棹教授、理学部伊谷純一郎助教授、教養部米山俊直助教授が所内のアフリカ文献資料のある調査室、理学部の自然人類学の研究室などを紹介、アフリカ研究に関心のある学生たちとお茶の会をもった。プリンストン大学で政治学を専攻し、長年駐英ケニア大使をつとめたあと、大統領の要請でナイロビ大学学長になったカラランジャ氏は、もとキングス・カレッジであったナイロビの大学を新興国としての大学として、十数か国の外人教師をかかえながら、がんばっているようであった。

書いたもの一覧

一九七二年二月——一九七二年三月

(五十音順、●印は単行本)



・会 田 雄 次

没落の妄想

湿润の文化と乾燥の文化

歴史学の没落(対談・小松左京)

●日本の風土と文化

●日本人の忘れもの

政治家が本心を語ったらなぜいけないのか

心 一二月号

淡交 一一月号

放送朝日 一一月号

角川書店 二月

PHP研究所 二月

月刊時事 三月号

宮崎滔天と吉野作造

朝日ジャーナル 三月

・荒 井 健

「唐詩選」

書評・多田道太郎著『管理社会の影』

京都新聞 一月二七日

人文 四号 二月

・荒 牧 典 俊

R・N・ダンデカー『インドと地中海世界の文化接触について』(翻訳)

ディオゲネス 六号 二月

・飛 鳥 井 雅 道

中江兆民とフランス語

国語通信 一四二号 一月

幸徳秋水(解説)『現代日本文学大系』(二二巻)

二月

漱石の位置

日本文学 二月

書評・栗原幸夫著『プロレタリア文学とその時代』

新日本文学 三月

大正期のアナキズム『日本近代化の研究』所収)

三月

・飯 沼 二 郎

国家権力とキリスト教

共助 一〇・一一月合併号

私の生き方(『台湾問題とエクレシア』第四回キリスト者

青年平和セミナー記録)

一一月

日本農業は滅びるか

毛沢東思想研究 一一月号

見えない人々——日本の朝鮮人——

京都労働機関誌 一一月号

書評・永田忠十郎著『日本農業の水利構造』

クリスマス мысли出

歴史理解と歴史創造

失われた個を求めて——大学闘争の提起したもの——

農業経済研究 一一月

キリスト新聞 一二月

大学キリスト者 一二月号

世界 二月号

新しい日本農業の創造(一)(二)

運動への誘いと運動の相互批判

キリスト者とプロ文革(『中国文明選』一五卷 月報)

三・一万歳事件と日本組合教会

朝鮮人と日本語をめぐる二人の日本人の対話(対談・鶴見俊輔)

最近における在日朝鮮人をめぐる市民運動

・市原 亨吉

・今井 清

・東洋学文献類目・一九七〇年度(共編)

京大人文研附属東洋学文献センター 三月

・梅棹 忠夫

・白氏文集卷二二(二四・二七・二八・三一・三三・補遺)

(共編) 京大人文研 三月

・上山 春平

・日本学事始(対談・梅原猛)

・カントのカテゴリ体系

・環境(『現代世界百科大事典』一卷)

・泉靖一における山と探検(泉靖一著『遙かな山やま』)

・泉さんと民族学博物館(『泉靖一著作集』一卷 月報)

・働くということ——スウェーデンの場合 サンケイ新聞 二月

・変革と情報——日本史のしくみ(共編) 中央公論社 二月

・日本人のころ——文化未来学への試み(共著) 朝日新聞社 二月

・イタリア中部山村の調査報告——Vita in un paese montano dell'Italia Centrale——(共著) 京大人文研 二月

・比較芸術論——日本と世界の芸術——(共編) 平凡社 二月

・人類にとって芸術とは何か(対談・河竹登志夫)

・比較芸術論(『比較芸術論』)

・比較芸術論——芸術論における比較文明論的アプローチ——

・梅棹 忠夫

・学問(『現代世界百科大事典』一卷)

・環境(『現代世界百科大事典』一卷)

・泉靖一における山と探検(泉靖一著『遙かな山やま』)

・泉さんと民族学博物館(『泉靖一著作集』一卷 月報)

・働くということ——スウェーデンの場合 サンケイ新聞 二月

・変革と情報——日本史のしくみ(共編) 中央公論社 二月

・日本人のころ——文化未来学への試み(共著) 朝日新聞社 二月

・イタリア中部山村の調査報告——Vita in un paese montano dell'Italia Centrale——(共著) 京大人文研 二月

・比較芸術論——日本と世界の芸術——(共編) 平凡社 二月

・人類にとって芸術とは何か(対談・河竹登志夫)

・比較芸術論(『比較芸術論』)

・比較芸術論——芸術論における比較文明論的アプローチ——

・梅棹 忠夫

・学問(『現代世界百科大事典』一卷)

・環境(『現代世界百科大事典』一卷)

・泉靖一における山と探検(泉靖一著『遙かな山やま』)

・泉さんと民族学博物館(『泉靖一著作集』一卷 月報)

・働くということ——スウェーデンの場合 サンケイ新聞 二月

・変革と情報——日本史のしくみ(共編) 中央公論社 二月

・日本人のころ——文化未来学への試み(共著) 朝日新聞社 二月

・イタリア中部山村の調査報告——Vita in un paese montano dell'Italia Centrale——(共著) 京大人文研 二月

・比較芸術論——日本と世界の芸術——(共編) 平凡社 二月

・人類にとって芸術とは何か(対談・河竹登志夫)

・比較芸術論(『比較芸術論』)

・日本学事始(対談・梅原猛)

・カントのカテゴリ体系

・環境(『現代世界百科大事典』一卷)

・泉靖一における山と探検(泉靖一著『遙かな山やま』)

・泉さんと民族学博物館(『泉靖一著作集』一卷 月報)

・働くということ——スウェーデンの場合 サンケイ新聞 二月

・変革と情報——日本史のしくみ(共編) 中央公論社 二月

・日本人のころ——文化未来学への試み(共著) 朝日新聞社 二月

・イタリア中部山村の調査報告——Vita in un paese montano dell'Italia Centrale——(共著) 京大人文研 二月

・比較芸術論——日本と世界の芸術——(共編) 平凡社 二月

・人類にとって芸術とは何か(対談・河竹登志夫)

・比較芸術論(『比較芸術論』)

・比較芸術論——芸術論における比較文明論的アプローチ——

・梅棹 忠夫

・学問(『現代世界百科大事典』一卷)

・環境(『現代世界百科大事典』一卷)

・泉靖一における山と探検(泉靖一著『遙かな山やま』)

・泉さんと民族学博物館(『泉靖一著作集』一卷 月報)

・働くということ——スウェーデンの場合 サンケイ新聞 二月

・変革と情報——日本史のしくみ(共編) 中央公論社 二月

・日本人のころ——文化未来学への試み(共著) 朝日新聞社 二月

・イタリア中部山村の調査報告——Vita in un paese montano dell'Italia Centrale——(共著) 京大人文研 二月

・比較芸術論——日本と世界の芸術——(共編) 平凡社 二月

・人類にとって芸術とは何か(対談・河竹登志夫)

・比較芸術論(『比較芸術論』)

・比較芸術論——芸術論における比較文明論的アプローチ——

・梅棹 忠夫

・学問(『現代世界百科大事典』一卷)

・環境(『現代世界百科大事典』一卷)

世界芸能史のなかの日本芸能——起源・発展・交渉——

【比較芸能論】

欧米の民族学博物館を見て

平凡社 一二月
朝日新聞 一二月

文献探索の訓練を——学生諸君——

京都大学園新聞 一二月

「脱文化」文明は可能か（対談・小松左京）

放送朝日 一二月号 一月

第三回バイオニア旅行記選評

旅 一月号

多極世界と日本の進路（対談・福田起夫）

サンケイ新聞 一月
毎日新聞 一月

新家庭論（一〜七）

●朝日講座・探検と冒険 一卷（編）

朝日新聞社 一月

朝日講座「探検と冒険」について（「探検と冒険」一卷）

朝日新聞社 一月

探検における陸上の移動と輸送（討論会）（「探検と冒険」一卷）

朝日新聞社 一月

日本人と探検（座談会）（「探検と冒険」一卷）

朝日新聞社 一月

われら水の子（対談・末石富太郎）上・中・下

人類の未来（対談・桑原武夫） ユネスコ新聞 一月

地球をどうする（座談会） ひらけゆく電気 一月号 一月

食事と文明（座談会） Energy 三十一号 一月

科学的方法論と探検（座談会）（「探検と冒険」八卷）

朝日新聞社 二月

探検（『現代世界百科大事典』二卷）

講談社 二月

現代と探検（座談会）（「探検と冒険」六卷） 朝日新聞社 三月

共同討議「日本人の生活空間」を終って 朝日新聞 三月

『絹貫宏介折本集』によせて 中外書房 三月

●Kyoto University African Studies, Vol. VII (ed.) 京都大学 三月

・梅原 郁

宋代茶法の一考察 史林 五五卷一号 一月

●遼金元人傳記索引（共編） 京大人文研 三月

・太田 武男

内縁縁組をめぐる諸問題——内縁養子保護の現段階——

上・下 法曹時報 二四卷一、二号 一、二月

・小野 和子

●清末民国初政治評論集（『中国古典文学大系』五八卷）

太平天国と婦女解放 平凡社 八月

東方学報 四三冊 三月

・寛 文生

中国現代作家の経歴調べ 人文 四号 一二月

「中国現代文学史」と「文芸講話」の位置

東方学報 四三冊 三月

・樺山紘一

異端者ドルチーノの叛乱

中央公論 歴史と人物 二月

ガブリエリ『地中海における科学と意識』（翻訳）

ディオゲネス 六号 二月

・川勝義雄

La décadence de l'aristocratie chinoise sous les

Dynasties du Sud *Acta Asiatica*, 21. 十一月

司馬遷とヘロドトス

アジア調月報 二二号 二月

・河野健二

激動の時代に応える学問 朝日新聞 十一月九日

書評・フォセール著、樋口謙一訳『社会主義契約論』

世界 一二月号

社会科学の「科学性」

経済論叢 一〇九卷一号 一月

国際経済学協会（IEA）評議会

学術月報 三月号

・衣川 強

◎遼金元人傳記索引（共編）

京大人文研 三月

・熊倉功夫

近代茶の湯人脈史（二三～二四）

日本美術工芸 三九八～三九九号 十一月～十二月

日記のなかの中世と近世（一～三）

日本美術工芸 四〇一～四〇三号 二月～四月

又玄夜話拔萃・おらが茶の湯（校注）（『日本の茶書』二卷） 三月

・桑山正進

タパ・スカンダル第一回発掘調査概報——迦畢試國の雲蔽

多伐刺祠城の比定—— 史林 五四卷三号 十一月

大理石ヒンドゥー像はヒンドゥー王朝のものか

東方学報 四三冊 三月

・阪上 孝

マルクス・コンメンタール『フランスにおける階級闘争』

『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』

現代の理論 一二月号

アルチュセールのイデオロギー論（一） 人文学報 三三号 二月

・島田虔次

梅園研究所感

梅園研究 二号 一二月

・副島圓照

日本紡績業と中国市場

人文学報 三三三号 二月

・多田道太郎

水上 勉『京の川』（新潮文庫）（解説）

『中山介山全集』一七卷（解説）

二月

同 一九卷（解説）

二月

脱意識について

読売新聞

一月

管理社会と性

月刊百科

二月

日本人の美意識

Graffication

三月

書評・石子順造著『俗悪の思想』

朝日ジャーナル

三月

・田中謙二

中国古典文学大系・戯曲集 下（編・解説）

二月

・竹内成明

言語における「疎外」と「物象化」の問題

思想 二月号

●レーニン（共訳）

河出書房

三月

・永田英正

漢代の集議について

東方学報 四三冊 三月

・中村賢二郎

西洋史研究とわれわれ

立命館西洋史 一月

再洗礼派と終末観

人文学報 三三三号 二月

・狭間直樹

孫文「遺囑」

共同通信系各紙 三月

●革命論集（『中国文明選』一五卷）（共著）

朝日新聞社 三月

共和制と帝制——辛亥革命における革命派の認識と行動——

東方学報 四三冊 三月

●清末民国初政治評論集（『中国古典文学大系』五八卷）（共訳）

平凡社 八月

・林巳奈夫

●中国殷周時代の武器

京大人文研 三月

・林屋辰三郎

●日本の古代文化（日本歴史叢書）

岩波書店 二月

●変革と情報（共編著）

中央公論社 二月

●日本の茶書（東洋文庫・共編注）一、二卷

平凡社 一一、三月

藩——発想と実態——

人文学報 三三三号 二月

能のなかの古文書（『鎌倉遺文』二卷 月報）

東京堂 三月

・樋口 謹一

ルソーと近代日本思想への影響

東洋学術研究 一九七一年秋季号

介山の創作ノート（解説）（『中里介山全集』一八巻）

筑摩書房 一二月

『松本清張全集』一三巻（解説）

文芸春秋社 二月

アクセロス『マルクスとフロイトと未来的思考』（翻訳）

ディオゲネス 六号 二月

書評・アンドレ・マルロー著・新庄嘉章訳『倒された檻の木』

公明新聞 一月一三日

書評・杉原泰雄著『国民主権の研究——フランス革命における国民主権の成立と構造』

日本読書新聞 一月一七日

・日比野 丈夫

祝允明・文徵明・董其昌（解説）（『書道芸術』八巻）

中央公論社 三月

・平岡 武夫

図書館利用案内はしがき

京大附属図書館 三月

●白氏文集 二冊（共著）

京大人文研 三月

・福永 光司

江戸期の老荘思想

図書 二六九号 一月

哲学における東洋と西洋（討論）（世界思想社『哲学を学

ぶ人のために』

二月

老荘の思想

朝日ゼミナール 八二号 二月

・藤枝 晃

神話の尾

図書 二六八号 一二月

于闐の風

日本美術工芸 四〇〇号 一月

書道 このふしぎな芸術

朝日新聞 一月二二日

敦煌写本の編年研究

学術月報 二四巻一二号 三月

・藤岡 喜愛

人間を考える「動物の世界から」（対談・小原秀雄）

放送朝日 一月号

同「サルの世界から」（対談・伊谷純一郎）

同 二月号

同「大いなる幻覚」（対談・加藤 清）

同 三月号

動物のティンディガ語名の資料から——知覚の特性について

人文学報 三四号 三月

・船越 昭生

北京の歴史地理（『世界地誌ゼミナール』一巻『東アジア』）

大明堂 一二月

新中国における工業の発展『世界地誌ゼミナール』一卷

『東アジア』

大明堂 一一月

・牧田諦亮

●梁高僧傳索引(『中国高僧傳索引』一卷)

平樂寺書店 三月

中国の宗教事情

大放光 一月号

松譽嚴的の疑経観(『浄土教の思想と文化』所収)

三月

・松原正毅

書評・佐々木高明著『稻作以前』

週刊読書人 一二月一三日

比較文明論の族

人文 四号 一一月

探検的行動の技術と知識(座談会)(『探検と冒険』一卷)

『アフリカ』

朝日新聞社 一月

・三宅一郎

社会的意決定の経済学(対談・根岸隆)

東洋経済新報別冊・近代経済学シリーズ 一二月

BMD(汎用統計プログラム・パッケージ)利用のために

(一)——入力データの形式とデータ変換機能を中心に——

京都大学大型計算機センター広報 五卷一号 一月

BMD利用のために(二)——BMD(クラスD)その一——

京都大学大型計算機センター広報 五卷二号 二月

現代都市の経済学的分析(シンポジウム・山田浩之・村松岐夫)

東洋経済新報別冊・近代経済学シリーズ 二月

書評・白鳥令編『計量政治学』

東洋経済新報 二月

世論調査型データ解析のコンピュータ・プログラム(三)

——データ・ワリーニングのための——

人文学報 三三号 二月

社会・人文系のためのプログラム・パッケージ——SPSSを中心に——

人文学報 三四号 三月

BMD利用のために(三)——BMD(クラスD)その二——

京都大学大型計算機センター広報 五卷三号 三月

・山下正男

言語表現の多義性について

思想 二月号

・吉田光邦

日本人の信仰と松(『日本の文様』一四卷)

一一月

黄河治水略史

波と流れ 一一月

瑣談——光悦

茶道雑誌 一一月

初代蘇山の歩み(『諏訪蘇山作品集』)

一一月

合理主義と個性

教育ノート 一二月

日本の陶芸

学鑑 一二月

伝統の技を訪ねて

家庭画報 二〇二月

同朋衆のことども

茶道雑誌 一月

わが手足としての道具	科学朝日	一月	発見と創造	日本美術工芸	一〜三月
人間と機械	近代経営	一月	中国の鉄	鉄	一〜三月
合理の愚行	アンド	一月	・渡部 徹		
終末への奉獻物 (「日下部濱江展」)	日本美術工芸	二月	組合運動と部落問題	機関紙・新座別	
日本の巨匠・光悦	トラベルブックス	二月	一〇月二〇日号・十一月一〇日号		十一月二〇日号
ルネサンスの故郷	望星	三月			
やきものはなし					

